

●岩松了

『となりの田中さん』（幸田真洋）を推した。スケッチ風の短いシーンを連ねて表面をなぞっただけの作品とちがって、マンションの四部屋を同時に見渡せるその四部屋の住人たちの“近所付き合い”を、丹念に描いている。その限りにおいて極めて通俗的な題材を扱っているわけだが、作家が通るべき道といえはいいのか、そのシーンの背景にあるものに想像を至らしめ、人がどういう時間と空間に“生かされている”のかを、ドラマの中心に据えている、その作家としての心構えが、群を抜いていた。だから、人物が登場するだけでドラマが始まっているのだ。そこには絶えざるユーモアの精神が潜んでいる。喜劇の精神と言ってもいいのだが、喜劇というには、もう少し“冷ややかな視線”を要求したくなる。こうした作品が今の演劇界で、より攻撃的なものとして機能してほしいというのは私の願望だが、それはたぶん、向かうところが“何もしない”という時間にある、と思うからだ。しかるのちに人は“何かする”。

一方、もうひとつの『喜劇ドラキュラ』（木下智之）、これは先の言い方を踏まえれば、何かを“しまくっている”作品だ。劇画的、ゲーム感覚、と思いつつ読み進めていたが、途中から、いや、それだけじゃない、と思い始めた。人物の人間性、あるいは非人間性、が実に的確ではないか、と感じ始めたのだ。しかもこれだけの世界を数人の登場人物で表現している。当節、この大きな世界を描こうとする作家が少なくなっている中で、19歳の作家が挑んでいるこの作品、九州戯曲賞として評価すべきではないかという空気が選考会をおおいはじめた。私もその意見には賛成した。私が先に言った“何もしない”だの“しまくっている”だの境界を無きものにする可能性が、この作品にはあるかもしれない、と思った。その場合、私は言い方を変えるわけだ。

演劇は「然るべき迷路を提示することに他ならない」

●中島かずき

幸田真洋さんの『となりの田中さん』を読み、「今回の一推しはこの作品だな」と思った。

アパート四室を舞台にしつらえ、各家庭のドラマを同時に見せる。しかも住民の名字は全員「田中」さん。

「これは誰が誰やら混乱しそうだぞ」と警戒して読み始めたのだが、そんな心配は無用だった。それぞれのキャラクターがはっきりしているので、なんの混乱もなく読める。

四家庭四様、一見ステレオタイプの配置に見えるが、後半になるにつれ、誰が正しいわけでもなく誰が際立って悪いだけでなくなってくる。新しい出来事が起こるにつれて、人物の立ち位置、見え方がずれてくる。

DVの旦那と別れきれない妻、新興宗教に入れ込む夫婦など、それぞれの設定は紋切り型と言えば紋切り型なのだが、関係性を壊すような出来事が起きても、結果的に物事を大きく荒立てない。誰が正しく誰が悪いなどというシンプルな解決をさせず、決定的な破局も起きず、一枚ペールを被ったような居心地の悪さを感じさせるラストを迎える。

その、大きく物事を荒立てずにゆるやかに不幸な日々に向かって行く感じが、なんとも今の気分を象徴するようで居心地が悪くなる。そうなる「田中」という平凡な名字を選んだことにも意味がある。まさしくこれは「となりの『田中』さん」の物語だよなあと、感心させられたのだ。

ところが、そのあと木下智之さんの『喜劇ドラキュラ』を読み、唖ってしまった。

「ドラキュラ」というが、これは吸血鬼の物語ではない。吸血鬼ドラキュラのモデルとなったと言われる串刺し公ヴラド三世の物語だ。

王とは何か、国とは何かという裏テーマも含めて、これだけ大きな構えのホンを見るのは、九州戯曲賞では初めてだ。しかも書いたのは19歳の大学生。本格的な長編戯曲はこれが最初だという。

国と国の合戦、ヴラドの有名なエピソードである大量の人数の串刺し刑など、実際の舞台ではどう処理するのかという無謀なト書きもたくさんあるし、古典劇的なセリフはまだ書ききれているとは言いがたい。荒さもある。だが、そこも含めて、勢いがいい。

ホンは若書きだが、構成力には才能を感じる。ヴラドと王妃の関係など、ちゃんと史実に則ったエピソードを自分なりに読み替えて終盤のドラマにするところなど、若いのに達者なものだと思った。

吸血鬼物でも喜劇でもないこの作品に、『喜劇ドラキュラ』というタイトルをつけるのも挑戦的だ。

(喜劇と名づけた理由に関しては、作者は作中で意図をあかしているが)

戯曲賞的に考えるなら大賞は『となりの田中さん』だ。だが、19歳にしてこの作品を書いた木下くんという才能の可能性を無視するわけにはいかない。

僕は、二作同時大賞受賞を推すと審査会前から腹を決めていた。

幸いなことと言うか、他の審査員のみなさんもほぼ同じ意見だったようで、二人の同時受賞ということになった。

それだけではなく今回は、横内さんの「戯曲における名前の意味」など、刺激的な議論も出来て非常に有意義な審査会だった。

これだけ振り幅の広い作品に出会えるのも九州戯曲賞ならではのだろう。来年、どんな作品に出会えるか、楽しみになった。

●古城十忍

今年の大賞は『となりの田中さん』と『喜劇ドラキュラ』の争いになる。その予感を持って最終審査会に臨んだ。それだけこの2作が他より頭ひとつ抜けていたのは明らかだったからである。

もちろん、ともに難点はある。『隣の田中さん』は同じアパートの上下左右4部屋が同時進行するという先行作品をやや彷彿とさせる設定なのだが、各部屋の住人のキャラクターが立ちあがってくるまでが遅い。ある部屋のカップルのDVが露見してくる中盤から人物像はようやく際立ち始め、生きた台詞も随所に出てくる。ただ、せっかく4部屋を同時に見せているのだから、「隣は何をする人ぞ」、その違い、そのズレをもっとふんだんに見せてもよかった。何と言っても俯瞰とクローズアップ、その両方が生かせる設定なのだから。そうすれば登場人物はもっともって冒頭から弾み、終盤でももっと大きな変貌を遂げたのではないか。つまり、まだまだ人物造形が浅く、どうもそのあたりが私には物足りない。

『喜劇ドラキュラ』はタイトルから吸血鬼の話かと思ったのだが、さにあらず、15世紀にオスマン帝国と対立したワラキア公国の王、ヴラド3世を主人公にした壮大な史劇。まず、このことに驚いた。こちらも前半に散見する不要なギャグが芝居のテンポの足を引っ張るものの、「串刺し公」と異名を取る後半からはぐいぐい読ませる。作者はなんと、まだ19歳。史実を調べた上で、そこに自らの想像力を駆使して書いている。そのことに感心。ただ残念ながら、台詞はまだまだつたない。難しい単語が並ぶ解説めいた言い回しが多く、「台詞は読むものではなく聞くものであること、しかも観客はたった1回しか聞けないこと」という当たり前のことを、この作者はまだまだ実感できていない。しかし、こぢんまりとした自分の周囲数メートルの出来事しか描かない戯曲が多い最近の傾向の中で、この構えの大きいドラマが異彩を放っているのは確か。この19歳がこの先、どんなオリジナリティあふれる言葉を獲得していくのか、期待を抱かせる。

『ボクと彼女の、花。』は、ある男女の人生を細かいスケッチを重ねながら描いたものだが、モチーフとした肝心の「花」の意味合いがどの場面でも同じ、というのがいただけない。意味が変わらないから、そこには表層しか生まれない。

『東京ジャングル』も意識的に短いスケッチを繋いで「東京に憧れる若者の希望と挫折」を描いているのだが、東京に憧れる理由も、東京で無力を味わわれる理由も、どこからか借りてきたようなエピソードばかりで新しい発見に乏しい。つまり、頭だけで考えて書かれている。

『放解←』は、「山頂」という日常とはかけ離れた場所を舞台にしておきながら、その場所がまったく生かされていない。場所が変われば肉体も変わる。肉体が変われば繰り出される言葉も変わる。そう私は思うのだが、この戯曲で交わされる会話は喫茶店でのそれとまったく変わらない。

振り返ってみれば、受賞に届かなかった3作はいずれも「肉体の不在」が最大の問題であろう。登場人物が感情的に揺れ動くときには、必ず肉体も揺れる。やはり作家も肉体を使って書くことが必要なのだと思う。

審査会は2本に絞った時点で全員が『隣の田中さん』と『喜劇ドラキュラ』を挙げ、それから1本に絞り込む議論に移ったが、いずれも甲乙つけがたく、結果的に2作品同時受賞となった。

一人は中堅、一人は新星。これからの九州の演劇シーンが楽しみになる審査会だった。

●横内謙介

驚嘆すべき新人が現れた。

木下さんの「喜劇ドラキュラ」は今、演劇が忘れかけているダイナミズムと劇的なものの興奮に溢れた野心作である。もっとも長い演劇史の中で、過剰にドラマチックであることは芝居にとって自明のことであったはずだ。それがたまたま今ひと盛りの、身近なリアリズムドラマ隆盛の流れの中で廃れていただけのことであろう。

そういう意味で、この作品は野心作ではなく極めてオーソドックスに書かれた正統派の戯曲であると言える。その視点で検証すれば、書き言葉に寄り過ぎた翻訳調のセリフとか、主役がやや類型で新味の魅力に欠けている惜しさとか、まだまだ改善の余地は見える。しかし、何とんでも十九歳の作家である。この若い才能がゲームシナリオでもなく、曖昧な時代のスケッチでもなく、古典的な手法を手本として、人間の生き様をドラマとして描き出す、戯曲としか呼びようのないものを書き上げている、この偉業を、何としても九州から全国に伝えなくてはならないと不思議な使命感を感じた。

幸い、その筋(?)のオーソリティの中島かずき氏が私以上に入れ込んでくれ、また好みのスタイルは違うはずの岩松氏、岡田氏、古城氏も大いに賛同してくれたために、私は簡単な応援をするだけで良くなった。ただこの新人の未来に期待する気持ちは、他の誰にも負けぬと思う。こういう作品を書く若者と出会いたいと、ここ数年ずっと思っていたその願いが、九州の地で実現したことを心から喜びたい。

もう一つの受賞作『となりの田中さん』については、作品のまとまりとしては『喜劇ドラキュラ』より上だと思う。舞台空間と芝居の時間の流れ方をしっかり掴んでいる作家で、リアルな展開の中に作者の企みを見事に調和させている。バラバラな四つの部屋を描きつつ、散漫にならずひとつの世界を起ち上がらせる力量は優れたもので、受賞にふさわしいと思った。

他の三作は、それぞれに着想が面白いと思ったが、独自のきらめきを発するには至らなかったと思う。というか、今年はこの二作が突出し過ぎていて、損をした部分もあったかもしれない。たぶん作者の意を汲む仲間たちの手で、舞台に乗せれば、それぞれに魅力を発揮するのであろう。しかしどこかで見たことのあるようなテイストで小さくまとめず、見も知らぬ他者たちを己の世界に強引に巻き込んでしまうようなオリジナリティとかインパクトを獲得してくれたら、我々余所者たちが、さらに期待出来たと思う。

●岡田利規

戯曲を書く者は、別に戯曲なんてなくたって演劇は作れるのだ、という基本的なことは、とりあえずわかっておくべきだろうとおもう。

演劇を作る場に携わる人々のアイデア、想像力を結集すれば、演劇は作れるのだから、戯曲なしに。

このテキストだけがその場に持ち込むことのできるなにか、といったものを持ってない戯曲、集団創作をひとりで肩代わりした、という以上のものでない戯曲は、もし存在しなくてもそれで演劇の豊かさの質が下がるわけではないのだから、要するに存在意義がない。

今回の候補作のうち、守田氏『ボクと彼女の、花。』、田中氏『放解←(カイホウ)』、大迫氏『東京ジャングル』の三つは、わたしにはそのような作品だった。集団のアイデアや想像力の寄せ集めでこのくらいのことは容易に思いつくだろう、という域を超えた何かがあるところにあると思うことができなかったのである。

戯曲は基本的には、個人によって書かれる。その個人は、演劇づくりの集団の一員であると、もちろん言えるけど、同時に、戯曲の執筆の現場というのは、そこと少し距離をとってもある。

そのような、いささか特殊な立ち位置にある戯曲が、そうであるからこそ演劇のなかに持ち込むことのできる豊かななにか、というのがある。

なにか、とはおもしろいストーリーかもしれないし、魅力的なキャラクターかもしれないし、卓抜な構成かもしれないし、絶妙な言葉遣いかもしれない。

今回の選考会では、先述した三作以外の二作、幸田氏『となりの田中さん』と、木下氏『喜劇ドラキュラ』に授賞するに至った。わたしも賛成した。

『となりの田中さん』には、登場人物の一人である女が、上質なコーヒーやこじやれた車をたしなむ消費主義的な嗜好を、切実に肯定するせりふがあって、わたしはこのせりふに感銘を受けた。簡単にいうと、消費主義はばかげていると思うけど、この女のことをばかげた考えの持ち主だと一蹴することは決してできない、と思ったのだ。

『喜劇ドラキュラ』は、書くことへの衝動に気圧された。上演を成立させるための現実的な処理に手だれなどしない。演劇づくりの場と拮抗するような、ともすると衝突することもあるような書くことへの欲望を持っている木下氏に演劇という場に関わり続けてほしい、という願いを、授賞に込めた。